健康社会学研究会

ニューズレター　No. 78

発　行：健康社会学研究会
事務局：〒164-8530 東京都中野区中野 4-21-2　帝京平成大学 現代ライフ学部 人間文化学科（担当 森川　洋）
FAX 03-5860-4945　E-mail：h.morikawa@thu.ac.jp
ニューズレター NO.78／2016 年 1 月　編集担当：助友　裕子

新年挨拶　変化の先に未来がある

健康社会学研究会　代表　松岡正純

日頃より研究会の事業に格別のご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

会員皆さまにおかれましては、2016 年の抱負を心に刻み、新たな気持ちで毎日をお過ごしのことと思います。

いま私たちを取り巻く社会は激動とも言うべき目まぐるしいスピードで変化しています。

人口減少社会の到来や少子高齢社会の進行は、私たちがいまだかつて経験したことのない未知の社会変化をもたらしつつあります。これからの時代に適応していくためには、変化を恐れず、今までの社会の価値観や仕組みの延長線上にはない新たな発想や別次元の取り組みが求められることになるでしょう。

しかし、私たちの多くは自己の経験から形作られた判断基準をもとに生きています。「今までこれでうまくやってきたから」と過去に縛られ、変化の必要性に気づけないまま決断のタイミングを逸してしまうことが少なくありません。

私は「このままじゃいけない」、「もっとよくしたい」と思った時、それが変化をおこすスタートラインであり、未来の新しい自分に生まれ変わるチャンスだと考えています。

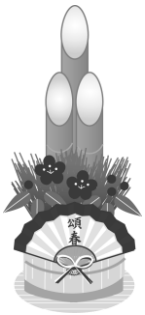
私は研究会活動を通じて多くの会員皆さまと出会い、語らい、交流の時を持たせていただきました。皆さまそれぞれに自身の研究、業務、実践が「このままじゃいけない」、「もっとよくしたい」という思いを持った熱い方達ばかりでした。

会員皆さまと月例会やセミナーにて互いに見聞を広めながら、懇親会で交流を深めあい、変化を生み出す原動力をつくりだすことができました。

変化には必ずリスクが伴います。失敗が頭をよぎることもあるでしょう。
しかし、私たちの未来は変化の先にあることを忘れてはなりません。

私たち研究会は、変化にチャレンジする会員皆さまの新しい自分創りを応援するとともに、分野・領域を超えた健康創造ネットワークの輪を広げ、
変化の先の未来を皆さまとともに拓いていきたいと思います。

本年も会員皆さまの各種事業への積極的な参画と温かなご支援を賜りますようお願い申し上げます。



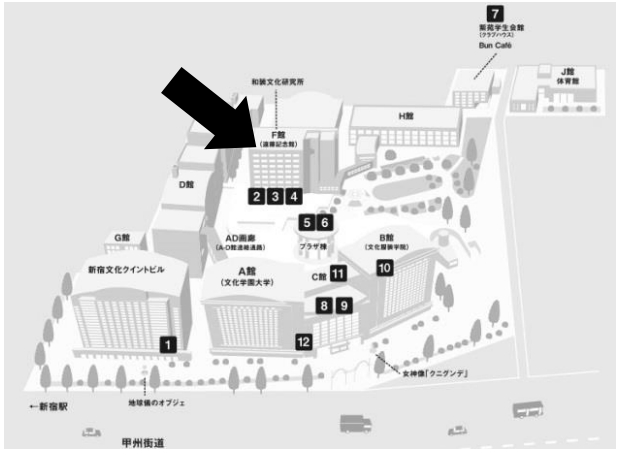
２月　第 116 回月例会のご案内

テーマ：　ファッションは人々の健康や幸福に貢献するのか？
　　―ファッション（健康）心理学の可能性―（仮）
報告者：杉田秀二郎氏（文化学園大学 現代文化学部 応用健康心理学科／本研究会運営委員）

日　　時：　平成２８年２月２７日（土）１５：００～１７：００
会　　場：　文化学園大学　F 館 4 階　F45 教室
　　渋谷区代々木 3-22-1（新宿駅南口より甲州街道に沿って、初台方面へ徒歩 7 分）
参 加 費：　会員無料　非会員 1,000 円

要　　旨：　ファッションというと、おしゃれやぜいたくといったイメージがあるかもしれません。しかし感情を活性化させたり、健康行動を促進したりするツール（手段）としての機能も有しているのではないでしょうか。エビデンスはまだ少ないかもしれませんが、心理学や健康心理学の観点からその可能性を探っていきたいと思います。

（キャンパス MAP）http://bwu.bunka.ac.jp/campus-life/facility.php　（会場までの地図）http://bwu.bunka.ac.jp/access/



１０月　第 115 回月例会のご報告

テーマ：　プログラム評価の概論及び方法論
　　－精神科デイケア&アウトリーチ統合化プログラムを題材に－
報告者：　下園　美保子氏（保健師・看護師）帝京大学医療技術学部看護学科
日　時：　平成 27 年 10 月 24 日（土）15:00～17:00
場　所：　ハロー貸会議室八重洲フィナンシャルビル（5F）
参加者：　１０名（会員８名、非会員 3 名）

晴天の秋晴れでやや暑いぐらいの土曜日、東京八重洲の貸会議室にて、第 115 回月例会が開催されました。今回は最近注目されつつある「プログラム評価」の概要を学ぶことを目的としました。

評価における現状と課題：看護学・福祉学や心理学等の対人援助サービス領域において評価への関心は非常に高く、評価方法の開発

は重要かつ喫緊の課題です。現在実施されている評価方法は主に、数値（量的）データを用いた成果評価と、文章（質的）データを用いたプロセス評価やストラクチャー評価があります（図 1）。それぞれの評価は別々に実施されているため、成果評価の結果からプロセスやストラクチャーをどう改善すればよいかが明確ではありません。つまり、現在の評価方法では PDCA サイクルが展開しにくいという課題があります。

プログラム評価とは：PDCA サイクルを効果的に生かす評価方法として、「プログラム評価」をご紹介。プログラム評価学の第一人者である Rossy(2004)は、「プログラム評価とは、社会プログラムの働きと効果に関する、情報収集、分析、解釈、伝達を目指す社会科学的活動」と定義しており、プログラムの改良や説明責任なども評価の目的であることを示しています。評価の種類は、評価指標をあらかじめ設定する形成的評価と、介入研究等で有効性を判断する総括的評価の 2 種類があります。特に地域における対人援助プログラムでは、地域住民を対象とするため介入研究が容易ではないことから、あらかじめ評価指標が設定されている形成的評価の方が馴染みやすいと言われています。

プログラム評価において実施する評価は、住民ニーズをアセスメントする「ニーズ評価」、プログラム介入によって最終的な成果が表出するまでのプロセスを図式化した「インパクト評価」、プログラム内容と実施組織体制の両方が含まれたプログラムの実施を評価する「プロセス評価」、最終的な成果を評価する「アウトカム評価」の 4 種類があります（図 2、図 3）。

まとめ：プログラム評価の特徴として特記すべきは「インパクト評価」という概念と評価方法でしょう。対象者が目指す姿（＝成果・アウトカム）に至るまでには、様々な段階を経て到達します。そうした段階を踏まえて評価できるのは、成果が見えにくい対人支援サービスにとってとても有

図 1

現状の評価方法の利点・欠点

	利点	欠点
量的データを用いた評価	全体像をつかみやすい 比較可能性が高まる 説得力が高まる 汎用性（一般化可能性）が高まる	数的変化の理由が推測の域を超えない データ収集と解析の際、専門知識と技術が必要
質的データを用いた評価	個々のプロセスや詳細を把握できる 変化の理由を把握できる	集団全体の傾向がつかみにくい 説得力が弱い傾向にある 汎用性（一般化可能性）が高くない

図 2

『プログラム理論』の概観

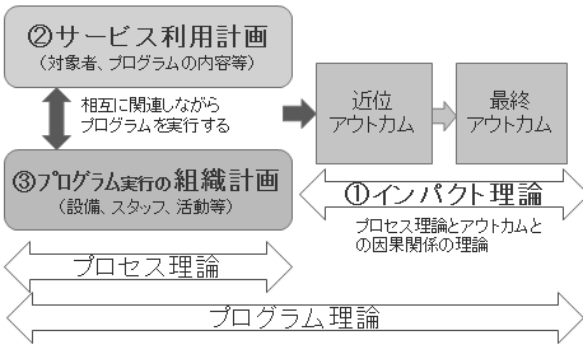


図 3

プログラム理論と評価の階層

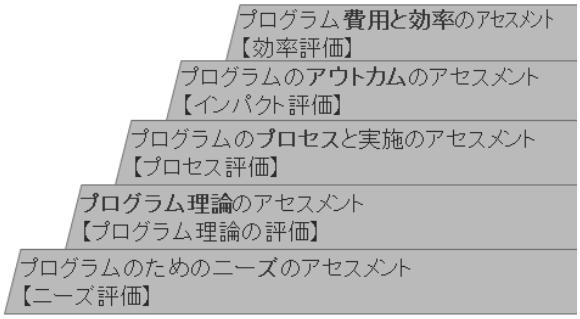
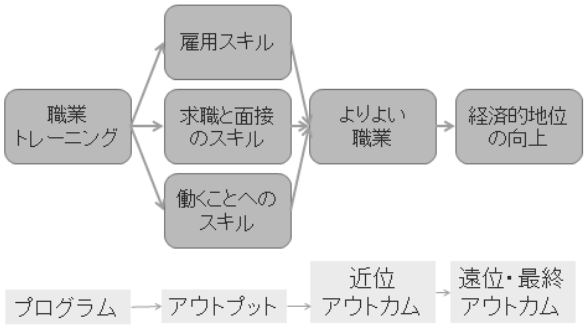


図 4

①インパクト理論の例：職業トレーニング



難い概念です(図 4)。またインパクト評価では、プロセスとアウトカムの結果を用いて相関分析を行います(図 5)。これにより実施内容が成果の改善につながっているかを相関係数による数値で推論することができるため、プログラムの改善項目を根拠に基づいて抽出し具体的に検討することが可能となります。

図５

インパクト評価:
援助要素と退院者数との相関分析

			登録前1年以上入院				
			1年以上入院者人数①	①の内訪問者人数②	①の内入院ケン人数③	①／②の割合	②の内訪問者人数④
	対象数(n)		238	226	175	123	168
	平均(SD)=		2.92(5.5)	1.41(3.5)	1.82(3.2)	0.57(.40)	0.93(2.1)
A-1 医療機関として目指す方向性・指針の明確化	2.85	(0.97)					
A-2 疾病支援の方向性	2.96	(0.86)					
A-3 自己選択・自己決定の機会の意識的な提供	3.06	(0.90)					.173*
B-1 関サービスを統合的に提供する調整部門または調整担当者の配置と機能	2.52	(1.09)				.191*	
B-2 関部門を統合するチーム会議	2.18	(1.09)				.193*	.185*
B-3 院内他部署との協力体制	2.38	(1.04)	.174**	.197**			.167*
B-4 院外協力機関の支援体制	2.47	(1.00)					.172*
B-5 インフォーマル資源の組織化・協働体制	1.44	(0.79)		.172**	.174*		
C-1 デイケアと訪問支援の関サービスを統合的に利用できることの広報体制	2.17	(1.03)			.217**	.200*	.164*
C-2 統合サービスの導入に際する様々な導入ルートの設定	2.60	(1.07)	.205**	.240**			.200**
C-3 統合サービス導入の際の丁寧な関係づくり	2.95	(0.93)		.131*			
C-4 対象者の希望に応じた、統合サービスの迅速な導入	2.73	(1.19)					
C-5 家族に対する疾病支援	2.35	(1.04)				.244**	.164*
C-6 デイケアの新規受容者に対する取り組み	3.15	(0.94)					

プログラム評価はプリシード・プロシード（MIDORI）モデルに近い理論です。MIDORI モデルに馴染みのある日本の場合、評価方法論が確立すれば導入が進むと思われます。PDCA サイクルを効果的に展開しプログラム改善に寄与するためにも、そしてなにより、専門職の活動が正当に評価されるためにもの、プログラム評価の方法論の早期の確立が急務だと思います。

【参考文献】

・キャロル・H・ワイズ著,佐々木亮監修：入門評価学-政策・プログラム研究の方法-,日本評論社,2014.
・ピーター・H・ロッシ他著,大島巌他監訳：プログラム評価の理論と方法-システマティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド-,日本評論社,2012.
・佐々木亮著：評価理論【評価学の基礎】,多賀出版,2010.

（文責　下園美保子／健康社会学研究会運営委員）

１１月　第 54 回健康社会学セミナーのご報告

テーマ：　地域力を高める：防災から始まる　まちづくり
　　ーDIG、HUG（災害机上訓練）で育む、ご近所との関係づくりー

日　時：　平成 27 年 11 月 21 日（土）14:00～17:00

場　所：　帝京平成大学中野キャンパス

プログラム：第１部　レクチャー「防災から考えるまちづくり」
　①キーノートレクチャー　「地域力を高める防災の基本」
　　石田　千絵　氏　（東京医療保健大学東が丘・立川看護学部　准教授）
　②　話題提供　「まちづくりにおける災害机上訓練の可能性
　　～地域を知って防災力を高める:DIG の実践事例を通して～」
　　臺　有桂　（健康社会学研究会／鎌倉女子大学短期大学部）
第２部　演習　HUG（避難所運営ゲーム）を体験してみよう
　ファシリテーター：　助友　裕子　（健康社会学研究会／日本女子体育大学）

わが国では、多くの災害を体験しており、近い将来にも、震災が発生する危険性が指摘されている。今回のセミナーでは、災害対策の基本を確認し、地域力を高めるために住民から専門職まで取り組むことができる災害机上訓練手法である『災害想像ゲーム』（DIG：Disaster Imagination

Game）の概要、『避難所運営ゲーム』（HUG：Hinanzyo Unei Game）の体験を通じて、防災から地域力を高めるアプローチ方法を参加者21名（会員12名、非会員9名）とともに実践的に学んだ。

まず、第1部では、「防災から考えるまちづくり」をテーマに、石田先生のキーノートレクチャー「地域力を高める防災の基本」を通して、大震災を中心とした防災・災害の基本知識を整理した。石田先生には、災害に関する法律の概要、災害時要援護者の特徴や災害時の課題、災害サイクルと健康被害の関連など、東日本大震災の実例などを交え、分かりやすく具体的にお話しいただいた。発災時には、“（津波）てんでんこ”に象徴されるように、まずは個々が自身の安全・生命を守ること、そのために日頃（平時）から情報共有の方法や建物の安全性確保などについて理解をし、備えをしておく大切さを確認した。また、その地域の人・ネットワークなどの特徴を踏まえ、自助・共助を中心とした地域の仕組みをつくりだす必要性についても強調された。さらに、避難所での支援活動の実際、被災者の心のケアでは他者との交流が何よりも大きな意味を持つことを映像を交え、丁寧にレクチャーをしていただき、日頃から共助と防災のあり方を考えていく大切さを学んだ。

次に、臺より「まちづくりにおける災害机上訓練の可能性～地域を知って防災力を高める：DIGの実践事例を通して～」をテーマに話題提供をした。地域の防災力を高めるには、地域全体でその地域特性に応じ、防災・災害に対する“ローカルな合意”を“協働で生成”することがポイントであり、その教育手法の一つとして災害机上訓練／ゲーミング・シミュレーションが有効であることを共有した。その実例として、災害机上訓練の一つであるDIGの概要と、災害時要援護者（事例では在宅難病療養者）の個別避難支援計画を目的とした地域ぐるみでの実践を紹介した。

ゲームによるグループ分けの様子

続いて、第2部では、「HUGを体験してみよう」をテーマに、石田先生・助友委員がファシリテーターとなり、小グループに分かれて演習を行った。HUGは、モデル施設を舞台に、提示されたカードの指示に従い、発災直後に避難所を開設し、時間軸に沿って被災者の受け入れや避難所運営をシミュレーションしていく災害机上訓練の一つである。今回は都内の某小学校をモデルに、避難所のレイアウトに関する指示カード21枚、被災者の状況を示したカード58世帯116人分（枚）、運営に関する指示カード79枚を用いた。演習では、発災から刻々と状況が展開していく中、避難所の運営者として起きている事態や情報を読み解き、スピーディかつ最善の判断を迫られる状況を疑似体験した。具体的には、避難所での事故と混乱を防ぐためには、受け入れ準備を整えてから被災者を受け入れることがポイントとなる一方、避難所開設はさまざまな判断をスピーディかつ的確に行う必要があることを体験的に学んだ。この演習を通し、公的な機関であろうと市民であろうとも、避難所開設・運営に関わる者は全て、発災後に起こり得る状況を予め想定しておき、日頃からの机上訓練や実地訓練を積み重ねていくことの大切さを再確認した。

今回のセミナーでは、『防災』とは、日頃からの人と人とのつながり、安全な環境づくりなど、つまりは、平時からの「自助」「共助」「公助」の観点

からのまちづくりであること、それらに日頃から丁寧に向き合っておくことの大切さを改めて確認できた。

防災・災害対策は、どの分野においても関心が高く、実践力が求められる課題であることから、レクチャー・演習いずれにおいても、参加者の真剣な思いが会場に充満していた。3時間という設定であったが、あっという間に時間が過ぎてしまい、もっとゆっくりとレクチャーから演習を体験をしたかったというのが、参加者全員の正直な感想だったのではないだろうか。機会があれば、今回参加できなかった方も交えてもう一度、あるいは災害の設定を少しアレンジして継続的に学んでいきたいと感じさせる一日であった。

（文責：臺有桂／健康社会学研究会運営委員）

事務局より

■ メールによる研究会情報の配信について

メールアドレスをお知らせ頂いている会員の皆様には、必要に応じメール配信による告知を行っております。まだお知らせ頂いていない会員の皆様もメールアドレスを事務局(h.morikawa@thu.ac.jp)までご連絡ください。

なおニューズレターは、これまで通り、紙媒体による送付を行っています。

どうぞよろしくお願いいたします。

■ 会費３年以上未納について

以下の方（敬称略）は、会費が未納です。未納３年以上の場合、退会扱いとなりますので、ご注意ください。

伊藤常久、黒岩美喜　森田健太郎

■ 平成27年度会費納入のお願い

毎年会費の納入についてご協力頂きありがとうございます。今年度会費の納入がまだお済みでない方は、同封の払込票、もしくは銀行振込にて平成26年度会費の納入をお願いいたします。（既にお振込みいただいている場合、払込票は同封しておりません）

【会費納入先】

郵便振替：００１００－８－４１０２５

銀行口座：みずほ銀行広尾支店　普通　１８４２１２２
健康社会学研究会　代表　松岡正純

ゆうちょ銀行（金融機関コード：９９００）
当座　〇一九店（ゼロイチキュウ店：店番０１９）
００４１０２５　ケンコウシャカイガクケンキュウカイ

■ 平成27年度退会届

平成28年３月31日（木）までにご提出ください。

会員の皆さま、月例会で報告してみませんか

◆◆◆　月例会報告者の募集　◆◆◆

学会報告や論文の投稿を考えている方、学位論文作成中の方、月例会で報告してみませんか。仮テーマ、発表のご希望時期を２月中旬までに事務局へお知らせください。